



第23回日本肘関節学会学術集会  
特別講演 1

# テニス肘を科学する

日時

平成23年  
2月26日(土)  
12:30~13:30

会場

東京ステーション  
コンファレンス  
第1会場(5Fサピアホール)

〒100-0005  
東京都千代田区丸の内1-7-12 サピアタワー  
TEL:03-6888-8080  
FAX:03-6888-8062

座長

**岡 義範** 先生

東海大学医学部附属大磯病院 病院長・教授

演者

**和田 卓郎** 先生

札幌医科大学道民医療推進学講座 特任教授

【認定単位】

日本整形外科学会専門医資格継続単位 1単位

1. 整形外科基礎科学
2. 外傷性疾患(スポーツ障害を含む)

日本整形外科学会スポーツ医資格継続単位 1単位

28. 肘の外傷と障害

日本手外科学会 1単位

10. 炎症性疾患

共催 第23回 日本肘関節学会学術集会  
三笠製薬株式会社

# テニス肘を科学する



**和田 卓郎** 先生

札幌医科大学道民医療推進学講座 特任教授



テニス肘は肘外側に疼痛を訴える頻度の高い疾患である。多くが、テニス肘バンド、ステロイド注射などの保存治療で治癒する。一方、10~20%の難治例は手術の適応であり、数多くの術式が報告されている。

テニス肘の病態は、短橈側手根伸筋(ETCRB)起始部の腱付着部症(enthesisopathy)とされる。従来関節外と考えられているこの病変に、滑膜ヒダや滑膜炎などの関節内病変も副次的に関与するという考えが一般的である。保存治療にせよ手術治療にせよ、テニス肘の治療法にエビデンスの確立したものはほとんどない。また、病態に関しても不明な点が多い。Martin Boyerはこの状況を“Lateral tennis elbow: Is there any science out there?”と揶揄した(J Shoulder Elbow Surg, 1999)。

我々はこの10年間、難治性テニス肘に対して肘関節鏡視下手術を行ってきた。鏡視下手術の利点は、低侵襲に加え、病態を詳細に観察できる点にある。本講演では、テニス肘の診断と保存治療を概説した上で、鏡視下手術の手技上のポイントと成績を述べる。さらに、鏡視下手術によって得られた知見をもとに行なった基礎的・臨床的研究を紹介し、テニス肘の病態に迫ってみたい。

---

## 略 歴

---

- 1984年 札幌医科大学医学部卒業  
札幌医科大学整形外科に入局
- 1988年 米国ペンシルバニア大学に留学
- 1997年 札幌医科大学整形外科講師
- 2000年 同准教授
- 2002年 JOA-AAOS travelling fellow
- 2010年 札幌医科大学道民医療推進学講座 特任教授を兼務

---

## 専 門

---

手外科、肘関節外科、マイクロサージャリー、スポーツ医学、骨軟部腫瘍